

日本フットケア学会スイス・ドイツ研修ツアー 2006 報告

足に集うマニアな人々、そしてスイスとドイツの違い

加藤 昌子 医療法人財団康生会東山武田病院, ET/WOC 看護認定看護師

昨年, 11 月に入ってもまだ暖かい 11 月 2 日からの 8 日間, 日本フットケア学会主催のスイス・ドイツ研修ツアーに参加しました。この研修ツアーは一昨年に続いて 2 回目, 実は私は前回も参加しています。私のほかにも 3 名の連続参加者がいました。前回のツアーと何が違うのか, 今回の目玉は何なのか, わくわくした気持ちを乗せて, まずはスイス, チューリッヒ空港へ降り立ちました。

参加者の内訳は, 看護師 7 名 (WOC 認定看護師, 糖尿病療養指導士, 透析病棟・老健施設勤務など), 医師 4 名 (整形外科, 循環器内科など), 靴販売業 1 名, 靴デザイナー 1 名と, バリエティに富んでいます。さらに通訳は現地ドイツ在住のフットケアに詳しい方が 2 名。どのメンバーも, 靴や足へのこだわりには一方ならぬものがあり, それは旅の途中でもちらちらと垣間見ることができました。



●ライン河沿いの散歩道をウォーキングする研修メンバー。

■整形外科靴職人マイスター IVO (国際整形外科靴技術者連盟) 世界大会への参加

今回のツアーの目的の 1 つに, スイスのバーゼルで開催される「整形外科靴職人マイスター IVO 学会」への参加がありました。整形外科靴職人とは, 一般の「お洒落な」靴とは異なり, 医療的に問題を抱える足に適した靴を作る専門職人のことで, マイスターとはそのトップである「親方」を指します。オートベディ・シューマイスター (OMS) とよばれ, スイス, ドイツでは国家資格です。

一人前になるには, まずギムナジウムという職業学校に行き, その後親方の元で最低でも 8 年の修行をして, 国家試験にパスしなければなりません。ヨーロッパでは, 古くから靴文化が発達しており, このような徒弟制度が国家資格として確立しているのです。

学会場には, OMS や, フットケアに関わる医師, 企業スタッフなどが, 最新の治療やケア方法, 機器展示や関連グッズを求めてヨーロッパ中から集まっていました。さらに学術集会では, 医師の治療報告に対して, OMS や企業スタッフが熱い議論を戦わせており, 日本の学会ではなかなか見られない光景でした。ここでは誰もが専門家で, 自らの知識や経験に基づいて足と靴の問題に取り組んでいるのだと, 強く感じました。

■フットケアサロン「マルガローリ & ヴェルネ社」訪問

私たちは, ドイツの OMS に研修



●研修参加メンバーたち。それぞれが靴にこだわりをもち, とても熱心でした。

のコーディネートを依頼しており, 前回はドイツのフットケアサロンを見学しました。ドイツでは, 美容的 (コスメティック) な分野は, フスフレーゲといわれる人がケアを行なっています。しかし, 糖尿病患者の足のケアができるのは, ポドローゲだけです。ドイツでは 2002 年に医療的フットケアの専門家「ポドローゲ」を国家資格として認め, 国が養成機関を始めました。ところがスイスは, 70 年前からポドローゲを国家資格として認めており, ヨーロッパの中でもフットケアの最先進国です。そこで今回のツアーでは, スイスでフットケアサロンを開いている「マルガローリ & ヴェルネ社」を訪れました。マルガローリさんは, 何とスイスのポドローゲ協会の会長で, 学会期間の最も忙しい時に, 日本から来た私たち「足マニア」のために時間を割いて, レクチャーを行なってくださいました。

このサロンでは, 一般の人が履く「足によい靴」の販売とともに, 糖尿病やリウマチなど, 医療的問題を抱える患者の足に適した靴や中敷の製作も行なっています。すでに潰瘍や胼胝や鶏眼などのトラブルを抱えている場合は, かかりつけの医師と連携して, 実際に処置を行なっています。スタッフは分業しており, 1 人の患者に, 足の医療的ケアをするポドローゲと靴を作成する OMS が協力してケアを提供します。ちなみに, この OMS とポドローゲの両方の資格を持つ人もいて, ツアーをコーディネートしてくださった方も両方の



● ウルム・リハビリテーション病院の医師 エックハルト氏によるレクチャー。



● リアルな足模型。ドイツ職人の技が光ります。



● ポドローゲ養成学校で。

資格を持ち、ドイツで開業しています。このように予防とケアの両方を提供できる会社(サロン)は理想的な経営形態と思いますが、まだ少ないということでした。

私たちは、ここで見学とレクチャーを受けたのですが、「巻き爪」に対するスイスとドイツのケア方法の違いは非常に興味深いものでした。

スイス式では、「巻き爪」で炎症があり、さらに肉芽形成を認める場合は、部分抜爪をして肉芽を硝酸銀で焼灼処置をする、とのことでした。しかしドイツ式では、抜爪はせず、ワイヤーやコットンテクニックなどで保存的にケアをするのが主流だそうです。もちろんケースバイケースで、すべてに適用とはいえないのですが、日本からやってきた私たちをそっこのけで議論する2人のポドローゲの姿はとても印象的でした。

■スイスとドイツの国境で

私たちが宿泊したホテルは、南ドイツのバーレンというスイス国境近くの町にあり、ここからスイスの学会に行ったり、ドイツの病院を見学したりと、スイスとドイツを行ったり来たりしていました。

スイスとドイツの違いは「巻き爪」の処置以外にもありました。日曜日にスイスの国境を通過しようとした時のこと、スイス側の国境に職員がおらず、国境が通過できないのです。ドイツ人のバスの運転手は「これだからスイスは……」と、別な国境に回って通過したのですが、ここでも

国境警備隊はいるのですが、通過料金を扱う事務職員がいないので処理できないと言います。怒った運転手が無理やりお金を置いて、国境を通過したのでした。運転手によると「ドイツではこんなことは考えられない!」そうです。日曜日は国境もお休み、とは何てヨーロッパ的呢でしょう。でも、私たち日本人は、何となく勤勉なドイツ人に共感してしまいました。

■実技を学ぶコースと研究所を見学するコース

今回のプログラムには、ドイツのポドローゲ養成学校での実技を学ぶコースと、ケルンのスポーツ大学で足のバイオメカニクス研究所を見学するコースがあり、二手に分かれて研修を受けました。

私は医療フットケアの実際を学べる、ポドローゲ養成学校のコースを選択し、研修生同士でフットケアの実習を行ないました。ポドローゲの鮮やかな手つきに驚き、さまざまなテクニックを学ぶことができ、非常に満足できる内容でした。

一方、靴と足の関係を科学的に分析するバイオメカニクス研究所コースは、靴の素材や形態がどのように足に影響するか、世界でも最新のデータを見ることができ、「足の形態と圧力に関して、新しい概念を学ぶことができた」と、参加したメンバーが驚いていました。フットケアに携わる人々の幅広さに対応できるプログラムでした。

スイスやドイツでは、他職種の人



● ドイツの美しい街並み。

たちが協力してケアを実践し、予防と治療がうまく融合しているシステムを構築しています。長い靴の歴史があり、足に対する意識の高さが人々に根付いているからだと思います。足を中心に、ケアをする人、治療をする人、予防をする人、靴や中敷をつくる人、そして素材や形を開発する人、とさまざまな職種の人たちが関わっています。それは、このツアーに参加した私たちのメンバー構成そのままです。日本のフットケアの歴史はまだ浅いけれど、このような研修ツアーを通じて、色々な職種の人が集い、友人となり、互いの経験を交換しあうことによって、日本のフットケアのシステムをつくることができるのではないのでしょうか。そんな希望を持つことができた研修ツアーでした。

● 日本フットケア学会 HP
<http://footcare.main.jp/>